艦娘のなく頃に

ゆるポメラ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

雛見沢での戦いを終え”航海者”の道を選び世界（カケラ）の旅を選択した少年と少女。

少年の名は柚深月穹（ゆみつきそら）、少女の名は緋未月羅奈（ひみつきラナ）

２人と同じ航海者である少女、水無月涼香（みなづきすずか）

そして穹の家具のクイナ

４人がカケラの海で何処の世界(カケラ)に行くか話していると、
突如１つのカケラが輝きだす……
目を覚ますと、
そこは絶海に囲まれた小さな孤島だった。
いったい自分達が飛ばされた世界(カケラ)は何処だと穹と羅奈、涼香の３人が話しているとクイナが穹に言った……

「マスター、どうやらここは”艦これ”の世界みたいです」

これは小さな孤島で自分達の艦娘を生み出し、
艦娘達と仲良く暮らしつつ、時たまに何処かに出撃してみたり等……
ほのぼのしてる筈の物語

「…男が僕しかいないってどういう事？」
「マスター、気にしたらダメですよ？」
「そうよ穹。気にしたら負けなのよ？」
「そうですよ先輩」

※注意事項

1．この作品は”ひぐらしのなく頃に”、”うみねこのなく頃に”とのクロスオーバーになります（苦手な方は注意!!）

2．『奇跡のなく頃に』のひぐらし編終了後の内容になります。

3．完全にオリジナルストーリーになっています（苦手な方は注意!!）

4．作者は艦これアーケードをやっています（大事なので言っておく）

5．作者の好きな艦娘しか出ません（大事なので2回言っておきます）

6．「おい出撃しろよ」と言いたくなる描写が入るかもしれません。

7．更新速度は速かったり遅かったりです。

8．シリアスや鬱な展開がある……かも

9．視点が変わる時がある（基本的には穹が視点）

10．艦隊編成は作者がアーケードで実際に使ってる編成になってます

11．作者の原作知識はにわかです（ここ超大事!!）

12．オリキャラ達が魔法で艦娘を治してる描写があります（ここも大事）

13．ある意味ハーレムモドキになってるかもしれません（念の為に言っておきます）

１４．過度な期待はしないでください（某３姉妹の末っ子発言）

上記の注意事項を守れる方のみ、
作品をお読みください。
感想や評価、お待ちしてます。

目次

第1話　旅の始まり　1
第2話　艦これの世界　9
第3話　妖精さんに艦娘を建造してもらった　14
第4話　開拓をしよう　25
第5話　穹と暁　30
第6話　羅奈と如月　36
第7話　こやつ…ただのピクミンじゃない！　40
第8話　おっそーい＋いい風きてる？　44

第1話　旅の始まり

ここはカケラの海。
分かりやすく言うと宇宙空間的な場所である。
…あ、自己紹介が遅れました。
僕の名前は、柚深月穹（ゆみつきそら）と言います。
「穹ー、誰に向かってお辞儀してるのー？」
そう僕に言ってきたのは親友の緋未月羅奈（ひみつきラナ）。
「…別に。なんとなくだよ。というか羅奈さっきから何を食べてるの？」
「んー？　飴ちゃんだけど？」
「…それってもしかして某有名な棒付き飴？」
すると羅奈は正解と言わんばかりに
自分が舐めている飴を僕に見せてくる。
やっぱりチュッ○チャ○スだったよ……
「穹も食べる？」
「…くれるなら」

そう言うと羅奈は1本の飴をくれた。
フレーバーは僕の好きなブルーベリー味だった。
「それにしても、あの2人遅いわねー」
そう呟いた羅奈。
僕達2人がカケラの海で何をしているかというと待ち合わせをしてるのだ。
といっても僕達と同じ航海者だけどね……
ちなみに航海者というのは一言で表すなら旅人である……
「それにしても穹、ほんとに良かったの？」
「…何が？」
「雛見沢を離れて良かったの？」
羅奈が言う雛見沢とは僕の故郷の事である。
実を言うと僕は色々あって雛見沢に戻れたのは惨劇に打ち勝ったあの時だけ。
「…いつでも帰れるから心配はしてないよ」
「ま、穹ならそう言うと思ったわ」
「じゃあなんで訊いたのさ？」
「んー？　梨花と羽入と離れて寂しいのかなと思っただけよ」
なんだかんだで心配してくれる羅奈。

すると目の前の空間が突然割れる……
「先輩、羅奈先輩、すみません遅れました」
割れた空間から現れたのは１２～１４歳くらいの女の子。
青みがかった黒色の髪をツインテールに纏めてて個性的な制服を着ている。
「あー大丈夫よ？　それにしても涼香が遅刻なんて珍しいわね？」
「ちょっと色々ありまして……」
羅奈の問いかけに苦笑い気味の少女。
彼女の名前は水無月涼香（みなづきすずか）。
僕の事を『先輩』、羅奈の事を『羅奈先輩』と呼んでいる……
最初は名前呼びでいいと言ったが涼香本人が『そっちの方が呼びやすいので』と言うので僕も羅奈も好きに呼ばせてあげている……
ある意味、先輩後輩という立場は間違ってないかもしれないけど……
「あれ？　クイナさんは来てないんですか？」
「それが残りはあの淫乱悪魔だけよ。遅刻とかふざけてるのかしら？」
涼香はまだ来てない人物を僕達に訊いてきた。
それを聞いた羅奈は悪態をつきながら質問に答える。
「あ、あの…羅奈先輩？　多分クイナさんは先輩が呼べば現れるんじゃ……」

その一言を聞いた羅奈は考える仕草をした後、
僕の方を見てきた……
「ちょっと穹……」
「…あ、バレた？」
「バレた？じゃないわよ!!　私とした事がこんな単純な事に気づかないなんて!!」
頭を抱えながらイライラしてる羅奈を放置して、
僕は召喚する魔法陣を展開する……
「…さぁさ、おいでなさい。煉獄の頂点に君臨し悪魔よ……」
詠唱を完了させると魔法陣が紅く発光し、
１７歳くらいの少女が現れた。
「煉獄のクイナ……ここに」
紅い髪を靡かせた少女は僕を見るなり……
「あ～ん♡、マスター♡」
「…なんで毎回くっつくのかな？」
抱きついてきた。
この子の名前はクイナ。
どういう訳か僕の事を『マスター』と呼ぶ……

「いいじゃないですか♪　私はマスターの家具なんですから♪」
「…まず僕は契約した覚えないし」
「クイナさん相変わらずですね……」
涼香が苦笑いする。
クイナは僕の家具と言ってるがそれは自称であり、
僕はクイナと契約した覚えはない……
その内諦めるだろうと期待していたがこれが意外と諦めが悪い。
まぁそれはさて置き……
「…これから何処の世界（カケラ）に行く？」
「マスター、放置プレイですか？」
「黙りなさい淫乱悪魔。エロい用語を使うんじゃないわよ」
「羅奈先輩もあんまりクイナさんの事を言えないと思いますが……」

すると突如１つのカケラが輝きだし、
辺りは光に包まれた……

「う……」
「マスター、大丈夫ですか？」
「…クイナ？」
「はいっ♡」
目を覚ますと、
クイナの顔があった。
どうやら膝枕をしてくれたらしい……
「クイナ、羅奈と涼香は？」
「お二人ならあそこに……ちょうど目を覚ましたみたいですね」
クイナの言う通り、
ちょうど目を覚まし起き上がろうとする羅奈と涼香がいた。
僕も起きないと……
「ありがとクイナ。介抱してくれて」
クイナの頭を撫でながらお礼を言うと……
「あ、いぇ、は、はぅ……／／／」
顔を俯かせながらモジモジしだした。
しかも心なしか頬がリンゴのように真っ赤だった……

「羅奈、涼香、大丈夫？」
「別に怪我とかはしてないから平気よ」
「私もです。それよりここは……孤島でしょうか？」
辺りを見渡すと一面が海だった。
僕達４人が今いる場所は砂浜で後ろを見ると岩山やら森等が視える……
涼香の言う通り何処かの孤島なのは間違いないようだ。
「これからどうするの穹？」
「どうするも何もそれ以前に……」
「私達が飛ばされたこの世界が何処か……ですよね先輩？」
そうなのだ。
まず羅奈が言うようにこれからどうするかも大事だが、
涼香が言ったように僕達が飛ばされた世界も把握しなければならない……
（とりあえずクイナに訊いてみようかな？）
そうしようと思ったところ、
クイナが僕の傍にやって来た。
もしかしてこの世界が何処なのか分かったのかな？
僕の言いたい事を理解したのかクイナは口を開き……

「マスター、どうやらここは”艦これ”の世界みたいです」

……はい？

ある意味、思考停止した瞬間だった。

第２話　艦これの世界

「「”艦これ”の世界いいい!?」」

クイナの衝撃的な発言を聞いた僕達は驚きの声を上げてしまった。

いや、驚かない方がどうかしてると思う……

「あ、あの…クイナさん……”艦これ”って、あの”艦これ”ですか？」

「はい。涼香さんのご想像通りです」

涼香の確認の質問に答えるクイナ。

つまり僕達は”艦これ”…正確には”艦隊これくしょん”の世界（カケラ）に飛ばされてしまったのである……

ここで疑問が浮かんだ。

「…ねぇクイナ、なんでこの世界（カケラ）が”艦これ”の世界（カケラ）だって分かったの？」

僕の一言に羅奈と涼香もクイナに視線を向ける。

真っ先に気づいたのは他でもないクイナだからだ……

すると彼女は……

「その事ですか？　マスター達が話してる間に海を見たら、ほっぽちゃん的な何かが海

面を走っていたので”艦これ”の世界だと分かったんです」
真顔で言い切った。
…ちょっと待って？
ほんの数分前だよね？　ていうかほっぽちゃん的な何かって何？
なんか色々とクイナに訊きたいがツッコんだら負けな気がするので何も言わない事にした……
「まぁ仮にここが”艦これ”の世界だとして……私達なんで飛ばされた訳？」
「知りません」
「いちいちイラつくわね、その言い方……」
羅奈の疑問に素っ気なく答えるクイナ。
この２人は基本仲が悪い……というより犬猿の仲と表現した方が正しい。
僕が仲が良いねと言うと……
『あり得ないから』
と声を揃えて言うのでやっぱり仲が良いとしか思えない……
まぁそれはさて置き……
「…とりあえず森の中に入ってみよ？」
「そうですね、この孤島の事も把握した方がいいかもしれませんね」

僕の提案に涼香が同意する。
羅奈とクイナも異論はないと言わんばかりに首を縦に振った。
という事で僕達４人は孤島の入り口であろう森の中に足を踏み入れた……

入って直ぐに何か光ってる小さな物体を見つけた。
近づいてみると全長が１５ｃｍくらいの小人が倒れていた。
「これって…妖精さんですか？」
「妖精さんって…”艦娘”を製造してくれる…あの？」
「ですね……でも酷く衰弱してますね」
正体は”艦これ”の世界の住人の妖精さんだった……
羅奈が言った通り”艦娘”を製造してくれたりするらしい。
ある意味、重要人物なのかもしれない……
ところが妖精さんは今クイナが言った通り酷く衰弱していた。
しかも怪我もしている……
「この島の妖精さんなのかな？」
「いえマスター、恐らく何らかの事故か何かでこの島に流されてしまったのかと思いま

す。幸い今から手当てをすれば夜には回復するかと」
とりあえず僕は妖精さんに回復魔法をかけた。
ついでに眠らせる魔法も同時にかけておく……
後は安心して休ませる場所とかがあればいいんだけど……
「宵、あそこに広場みたいなところがあるわよ」
羅奈が指を差した方に目を向けると、
小さな広場が視えた……
「ほんとだ。ちょうどいいし今日はあそこで野営しよ？　この妖精さんの事も気がかりだし……」
「そうですね。ちょうど日も暮れそうみたいですし……」
となればやる事は1つだ……
「僕と羅奈は薪を集めてくるからクイナと涼香は妖精さんの面倒をお願いね？」
「はいマスター♪」
「先輩、気をつけてくださいね？」
「ま、適材適所ってやつね…行ってくるわ」
妖精さんをクイナに預け、
僕と羅奈は森の奥に進む事にした……

（この島ってどうなっているんだか……）

それだけが少し気がかりだった……

第3話　妖精さんに艦娘を建造してもらった

妖精さんの介抱をクイナと涼香に任せ、
僕と羅奈は森の奥まで進み薪を集めていた。
「穹ー、これくらいでいいかしら？」
「まぁ大丈夫だと思うよ？　ひとまず3日分まであれば」
「でもなんで3日分なの？」
「…なんでだろうね？　そこまで深くは考えた事はなかったし」
それを聞いた羅奈は苦笑い気味である……
この質問は梨花ちゃんや羽入ちゃんにも同じ事を聞かれた事があるので、
正確な答えが今でも分からないのである。
そんな事を考えていると足元でキラリと光ってる物を見つけた。
気になったので拾ってみる……
「…これって弾？　いや……何かの弾薬かな？」
その正体は何かの弾薬みたいだった。
落ちてた周辺をもう一度見ると弾薬の箱が落ちてた……

「ねぇ穹、こんなのが落ちてたわよ？」
羅奈が僕に見せてきたのは何かの鋼材だった。
しかもかなりの量である……
「何処に落ちてたの？　それ……」
「その辺に落ちてたわ……って何その弾薬？」
「分かんない。何かの弾薬なのは間違いないかと思うんだけど……」
「…ふーん、とりあえず戻りましょ？」
「そうだね」
薪と弾薬の箱、そして鋼材みたいな物を持ち、
僕と羅奈はクイナと涼香が待ってる広場に戻る事にした……

「あ♪　マスターお帰りなさい♪」
広場に戻るとクイナが抱きついてきた。
というか離れてくれないかな……いや無理か。
「先輩、羅奈先輩お帰りなさい。ちょうど妖精さんが目を覚ましたところなんです」
涼香の足元では妖精さんがコーヒーを飲んでいた。

自分の背丈より高いマグカップを器用に持っている……
もしかして意外と力持ちなんだろうか？
「…クイナ、妖精さんの体調とかはどう？」
「目を覚ました時に具合が悪いところはないか訊いたんですけど1晩休めば問題ないと言ってましたので」
「それよりクイナって妖精語、分かるんだっけ？」
「あ、はい。それなりには……」
クイナと話していると、
妖精さんが僕の元に飛んできたので手のひらに乗せる。
すると頭をペコペコと下げ始めた。
「助けてくれてありがとうございますって言ってますね」
クイナが翻訳する。
動作と表情を見れば何となく分かるのだが、
やっぱり妖精語が分からないと辛い……
「先輩、羅奈先輩。この木の実を食べれば妖精語が分かりますよ？」
「…ありがと」
「妖精語が分かる木の実って存在してたのね……」

見かねた涼香が僕と羅奈に妖精語が分かる木の実を渡してくれた。
さっそく食べてみる……
…なんか爽やかな味だった。
「あのぅ…この度は助けていただいてありがとうございます」
いきなり妖精さんが喋り出したので、
僕達４人はびっくりしてしまった……
羅奈ですら口にくわえてた飴を落としてた。
とりあえずその場に座り妖精さんから話を訊く事に……
「実は…わたし…鎮守府という場所の工廠で働いていたんです……」
気になる単語が出てきたので羅奈達に念話を送る。
『妖精さんが言ってる鎮守府って？』
『確か…”艦娘”や”提督”が所属してる場所じゃなかったかしら？』
『工廠というのは多分…大雑把に言えば製造場で合ってますよね？　クイナさん？』
『はい。妖精さんは艦娘や装備等を管理してくれるんです』
そういえばそんな役割があるって聞いた事がある。
まぁ鎮守府がどういった場所なのかは理解できた……
「ある日、前の提督が病気で倒れて別の提督が着任したんですが…その……」

妖精さんは何やら言いにくそうだった。
その様子を察したのか羅奈が口を開いた……
「性格が妖精ちゃん的に気に入らなかった……とか？」
妖精さんは静かに頷いていた。
「その日以降は地獄でした。わたし達は碌に休めず働く日々でした……それで昨夜に脱走をしたんですが運悪く見つかって……」
その先は僕達でも分かった。
恐らく暴力的な事をされたんだろう……
妖精さんが怪我をしていたのはそれが原因だろう。
それで海に捨てられ、この島に流れ着いた……という訳か
「あのぅ…失礼ですが、あなた方は……？」
妖精さんが僕達の事を尋ねてきた。
そういえば自己紹介とかしてなかったよ……
「僕は柚深月穹。穹でいいよ？」
「私は緋未月羅奈。羅奈って呼んでね♪」
「水無月涼香です。涼香でいいですよ？」
「クイナといいます。マスターのどｒｅ……使い魔です（ドヤッ！）」

なんかクイナが変な事を言おうとしてたような気がしたが、
気にしない事にした……
「あのぅ…何かお礼をさせていただけないでしょうか？」
妖精さんが上目遣いでお礼がしたいと頼んできた。
…なんか可愛いなと思ったのは内緒である。
それにしてもお礼か。別に見返りとか求めてないし……
「穹、さっき私達が拾ったのが何か訊いてみれば？」
「…それもそうだね」
妖精さんを一旦降ろし、
薪を集めた時に拾った弾薬の箱と鋼材を妖精さんに見せる。
「これって何に使うやつなの？　さっき拾ったんだけど……」
すると妖精さんは……
「これは艦娘や装備を建造する時に使う素材の内の２つです」
なんと僕と羅奈が拾ったのは、
艦娘を建造する素材だった……
それ以前になんであの場所に落ちてたんだろ？
「良ければ皆さんに艦娘を建造します、いえ建造させてください！」

「…え、でも迷惑なんじゃ……？」
「残りの素材の２つは脱走する際にくすねてきたので大丈夫です！」
どうやら妖精さんは、
助けてもらった恩はきちんと返さないと気がすまないらしい……
無下にもできないのでお願いする事にした。

「では、どなたから始めますか？」
妖精さんは準備万端と言わんばりに訊いてくる。
使う資材は”燃料”、”弾薬”、”鋼材”、”ボーキサイト”の４つだそうだ。
へぇ……これで艦娘を建造するんだー。
企業秘密とか大丈夫なのかな？
「マスター、私から先によろしいでしょうか？」
「うん、いいよ？」
一番手はクイナになった。
妖精さんは指紋認証みたいな事をした後、
作業を開始した……

トンカン♪　トンカン♪

なんか凄い音が目の前で鳴ってるけど……

仕切り的な物が張ってるので作業内容が視えないだけマシかな……

ここにいる全員が思った。

「卯月で～す♪　うーちゃんって呼ばれてま～す♪」

「まぁ♪　可愛らしい♪」

クイナ、馴染むの早過ぎ……

確かに可愛らしいけど戸惑うな……

そんなこんなで次は涼香の番である……

トンカン♪　トンカン♪

またまた鳴る作業の音。

流石に２回目に聴くと慣れてきた……

「貴女が司令官ですね、三日月です」

「えっと…普通に涼香って呼んでいいよ？」
「了解しました、涼香」
涼香は司令官という呼び方に抵抗していた。
でもなんだかんだで嬉しそうだ。
残るは羅奈と僕の２人になった……

トンカン♪　トンカン♪

なんか３回目になると癖になってくるな。
不謹慎かもしれないけど……
「如月と申します。お傍に置いてくださいね」
「何かしら？　この子とは気が合いそう……」
「あら♪　私もよ♪」
雰囲気が羅奈に似ている艦娘だった。
なんで２人して僕の方を見るの？
今夜あたりから対策を考えておかないと……
「最後はマスターの番ですよ？」

「…ごめん、すっかり忘れてた」
気を取り直して妖精さんにお願いする。
やっぱり指紋認証みたいな事をされた……
この世界（カケラ）では艦娘を建造する際は当たり前なのかな？

トンカン♪　トンカン♪

本当に作業音が癖になってしまいそうだよ……
それにしても僕の艦娘ってどんな子なんだろ？
普通に接するけどさ……
「暁よ、一人前のレディーとして扱いなさいよね」
「…じゃあ先ずは友達からって事で」
「べ、別にいいけど……／／／」
「…よろしくね暁」
「う、うん……／／／」
ところで暁はなんで顔が真っ赤なんだろうか？

別に変な事は言ったつもりはないんだけど……

こうして僕達４人は妖精さんに艦娘を建造してもらいました。

第４話　開拓をしよう

「この島を開拓しませんか？」
艦娘を建造してもらった翌日の早朝。
妖精さんが突然そんな事を言った……
「確かにずっと野営っていうのもねぇ……」
羅奈が朝食のデザートを食べながら同意する。
本日のメニューは焼き立てのパンとベーコンエッグ、野菜スープだ。
そしてデザートは昨夜の内に作り置きしておいた僕の手作りプリンである……
「…とりあえず家的な物は建築しないと」
僕は別に野営でもいいのだが今回ばかりはそうはいかない。
理由としては女性比率が多いから。
羅奈、涼香、クイナ、妖精さん、そして艦娘の４人……
ここにいる女性人数は合わせて８人である。
「ですがマスター、家を建てるのはいいですが建築場所も決めなくてはいけませんよ？
なるべく敵に見つからない場所且つ私達が迷子にならないような場所にしないと」

「…だよねー」
クイナの意見は尤もだ。
いつ敵に狙われるか分からないし下手したら、
妖精さんから聞いた鎮守府の人間にも狙われる可能性もある……
「後は…なるべく水道とかが通りそうな場所が好ましいですね」
「…となると地下水脈か。あると良いんだけど……」
まだこの孤島を把握してないので、
いわゆる『ありそうでなさそう』なのが今の現状だ……
「先輩、それならちょうどいい場所がありましたよ?」
悩んでいると涼香が助け舟を出してくれた。
これには他のみんなも驚いている……
「先輩達が昨夜、仮眠をとってた間に私と三日月ちゃんで少し見回りをしたら家を建てる場所にピッタリな土地を見つけたんです」
「それだけじゃなく温泉も発見しましので一石二鳥でした」
涼香と三日月が僕達に説明する。
…あぁ、だから見回りから戻ってきたのが遅かったんだ。
ちなみに仮眠してる時に暁が僕を抱き枕にしながら寝てたのは余談である……

「じゃあ今からその場所に行こっか」
昨日集めたばかりの薪を持った後、
僕達は涼香と三日月が見つけたという土地に向かう事にした。

ーー目的地に向かう際の出来事ーー

突然だが歩きにくい状況になってます。
その理由が……
「あのさ…離れてくれない？」
「ふふっ♪　嫌よ♪」
羅奈と如月に両腕を組まれてるからである……
ちなみに背後では……
「あの女!!　私のマスターを誑かしやがって!!」
「クイナさん落ち着いてください!?　三日月ちゃんも止めて!!」
「その隣は暁の場所なんだから～!!」

「すみません私も暁を止めるのに精一杯なんです!?　卯月も手伝ってくださいよ!!」
「いやだぴょ～ん♪」
暴れるクイナと暁を、
必死に止める涼香と三日月と面白がってる卯月がいた……
チラッと見たが暁がフル装備状態だったのは気のせいだと思いたい。
「「ふふっ♪」」
この２人、絶対ワザとやってるよ……
いや確信犯って言っていい。
実際に今も腕を組む力を強めてきた羅奈と如月。
からかうのはいいけど程々にした方がいいと思う……
何故なら……
（後ろから弾薬のリロード音が聴こえてくるんだけど……）
ついでに言うと、
シャキンと刃物を抜刀する音も微かに聴こえた。
これは多分クイナだろう。
この状況をどうしようかと思ってると涼香から……
『すみません先輩。クイナさんと暁ちゃんの眼がヤバくなってます……私と三日月ちゃ

んで押さえるのも時間の問題っぽいです』
念話で死亡宣告的な事を言われた。
なんとか目的地に着く前に後ろの２人と、
未だに両腕を組んでいる羅奈と如月に悩む僕だった……

第5話　穹と暁

なんとかクイナと暁の暴走を止め、
僕達は目的地に辿り着いた……
（…確かに土地的にはうってつけだな）
周りは草原に囲まれており、
目の前には高山から流れているであろう滝が視えた。
すぐ近くには昔この島に住んでいた人の名残なのか畑が残っていた……
手持ちの種さえあれば直ぐに栽培できるレベルだった。
「マスター、この後はどうなさいますか？」
荷物を置いた直後、
クイナが僕に訊いてきた。
他のみんなも僕の指示を待ってる様子だ……
なんかいつの間に僕がリーダー的感じになってる事に、
ちょっとだけ戸惑ってしまう……
「…今日は素材とかを集めようかなと思ってる」

「もしかして家を建てる素材とか？」
「そういう事、探索も含めてもだけどね……」
「まさか全員で探索なんて言わないでしょ？」
「…流石にそんな事したら迷子になるよ」
羅奈の質問に答える僕。
ここにいる全員で素材集めを含んだ探索をするのはあまりよろしくない……
そこで探索に行くグループと荷物番グループに分かれる。
なので……
「…涼香とクイナは荷物番で」
「分かりました。」
「はい♪　マスター♪」
「三日月と卯月は涼香とクイナの手伝いをお願いね？」
「了解です」
「まかせるぴょ～ん♪」
涼香、クイナ、三日月そして卯月は荷物番グループ。
「残りは探索って事で」
羅奈、如月、暁そして僕が探索グループに分かれるという……

なんでこのグループにしたかというと……勘である。
何故かこのように分けた方が良いと脳裏を過ぎったのである……
「じゃあ……行動開始ー」
「「「「「おー♪」」」」」
「お、お～……」
みんなが掛け声をする際に、
暁が出遅れたのが印象的だった……

「…じゃあそっちの探索よろしくね？」
「はーい、如月ちゃん行きましょ？」
「そうね♪　じゃあ2人も気をつけてね♪」
途中まで4人まで行き、
目印であろう看板で羅奈と如月と別れた。
ここに辿り着くまで草原を歩いたから何気に苦労したよ……
そして現在、暁と2人で素材集め中である。

「…んしょ…んしょ……」
「…ねえ暁、重いなら僕が持つよ？」
「へ、平気よ!!　これくらい暁１人でも余裕よ！」
ちなみに暁が持ってるのは木材や使えそうな貴金属。
本人は何でもなさそうに言ってるが、見てるこっちとしては危なっかしい事この上ないから心配だ……
だって持ってる両手がプルプル震えてるんだもん……
（それにしても……あの高山の地形どこかで見た事が……）
ここに着いた時から気になったのだが、
目の前にある高山そのものが何処かの世界（カケラ）で見た事がある気がする。
ここからだと中腹辺りまでしか目視できない……
「きゃん!!」
そう考えてた矢先、
暁が転んでいた……
彼女の周りにはさっきまで持っていた資材が落ちていた。
「うう……」
涙目の暁。

まさかどこか怪我しちゃったのかなと思った僕は駆け寄った。
頭を撫でると今度は頬を膨らませながら……
「あ、頭をナデナデしないでよ！　子供じゃないんだから……／／／」
「…えー？」
拗ねてしまった。
プンプンという擬音が付くぐらいの拗ね具合である……
とりあえず落としてしまった資材を拾う。
何も言わないが暁も拾うのを手伝ってくれた……
「…さて、みんなの場所に戻ろっか……ってどうしたの？」
暁が何も言わないのでどうしたのかなと思ったら、
僕の服の袖を掴んでいた……
「手…繋いでも……いい？」
上目遣いになりながら手を繋ぎたいと要求してきた。
というか既にちゃっかり手を繋いでいますが……？
なので何も言わずに握り返してあげると……
「ふふっ♪　穹の隣は誰にも譲らないんだから」
上機嫌になった。

何か言ってた気がしたけど聞こえなかった……

まぁでも……

（暁が喜んでるならいっか……）

第6話　羅奈と如月

ヤッホー☆　羅奈ちゃんよー☆
穹に頼まれて島の探索をしてるの。
「羅奈ちゃーん、この木材は使えるかしら？」
声をかけてきたのは如月ちゃん。
見せてきたのは中途半端な大きさの木材だった……
「小物入れを作る時に使えそうだから持って行きましょ」
「じゃあ籠に入れておくわね？」
それにしても如月ちゃんはエロい身体つきをしてるわね～♪
よく見たら肌も綺麗だし髪もサラサラ……どうやったら保てるのかしら？
（…にしてもこの島はどうなってんのかしら？）
私と如月ちゃんが今いる場所は高山の中腹辺り。
穹と暁ちゃんと分かれてここに着くまでに色々と変な物を見かけた……
見覚えのない金属の欠片とかトマトとか……
「あら？」

「どうしたの？」
「あの芽みたいなのって何かしら？」
　如月ちゃんが指をさした方を見ると、
　地面に何やら芽？みたいなものが埋まっていた。
　しかもなんか怪しい光を放ちながらユラユラと揺れていた……
（まさか…いやでも……そんな筈は……）
　この謎の物体…というより芽に私は心当たりがあった。
　仮に私の予想が当たってるとしたら……
「引っこ抜いてみましょうか？」
「…なんで如月ちゃん目がキラキラしてるの？」
「ん～？　なんとなく♪」
　なんとなくって……まぁ私もそんな感じだけど……
　考えても仕方ないので近づいて芽を引っこ抜くと……
「オサキニ♪」
　可愛い声を上げながら地上に現れた……
　っていうかこの子って……
（ピクミンじゃない!?　なんで艦これの世界にいんのよ!?）

その正体はピクミンだった。

身長が２ｃｍ程度の二足歩行生物……人畜無害そうな瞳で私と如月ちゃんを見ている。

ちなみに色は赤だった。

（この世界（カケラ）ってほんとに”艦これ”の世界よね？）

ピクミン（イレギュラー）が入った時点で”艦これの世界”でないのは確か。

それとも特設舞台的なナニカかしら……？

「羅奈ちゃん、せっかくだからこの子みんなの所に連れて行かない？」

「そ、そうね…連れて行きましょ」

一緒に行く事が分かったのか赤ピクミンは敬礼をしている。

…相変わらず仕草が可愛いわね……

（そうなると近くにオニヨンがある筈……）

ピクミンがいるという事は彼ら（もしくは彼女）を増殖する機体？ともいえるオニヨンが

近くにある筈だと推測した私は周りを見回してみたがソレらしき物は見当たらなかった……

「それにしてもこの子小さいわね～、妖精さんよりも小さいんじゃない？」

「まぁ身長が２ｃｍ程度だもの。あり得なくはないかもね」
現在ピクミンは如月ちゃんの肩に座っている。
しかも表情？がこんな感じ（／・ω・）／になっている……
正直に言って凄く分かりにくいわ……
とりあえず戻ったら穹達に報告ね。

第7話　こやつ…ただのピクミンじゃない！

「…で？　なんでピクミンがいるの？」
「ま～…そんな反応よね～」
羅奈と如月が戻ってきてたと思ったら何故かピクミンを連れて来た。
訊いたところ羅奈と如月が探索してた場所に芽があって試しに引っこ抜いてみたらピクミン……正確には赤ピクミンが現れたとの事。
「それにしても可愛いですね♪　マスター？」
「それは同感……」
現在ピクミンは妖精さんと話している。
なんとも珍妙な光景だ……
それにしても一体なんの話をしてるんだろうか？
「わかりました。明日までには完成させますので」
「ウォ～」
一応会話は成立してるらしい……
涼香と羅奈は苦笑いしておりクイナと如月は微笑ましそうにしている。

暁と三日月、卯月に至っては興味深そうにピクミンを見ていた……
「…ねぇ、何の話をしてたの？」
「えっとですね？　コレを作って欲しいと頼まれまして……」
ピクミンと何を話してたのか気になった僕は妖精さんに訊いてみた。
すると妖精さんは設計図のようなものを見せてきた。
「先輩…これって”オニヨン”じゃないですか？」
「…ぽいね。」
そこに描かれていたのはピクミンの増殖母体ともいえる”オニヨン”だった。
というかソレにしか見えない……
「ン？　ン？」
設計図を見終えるとピクミンが何かを興味深そうに見つめていた。
どうやら僕と暁、羅奈と如月が集めてきた素材が気になるらしい……
すると貴金属の塊を担ぎ始めた……え？
「凄いぴょん！　小さいのに力持ちだぴょん」
「「「いやいやいやいやいやいや!?」」」
艦娘達から見ればピクミンの行動は凄いかもしれないが、
僕や羅奈、涼香とクイナにとってはツッコむところがあり過ぎだ。

何故ならピクミンの腕力は微々たるもので自分の身体より小さいものなら1匹でも運べる……

逆に自分の身体より大きいものは集団で運べない筈なのだ……

ピクミンが今担いでいる貴金属の塊はピクミンが10匹いないと運べない大きさだ。

「ポォ♪」

そして余裕そうに軽々と貴金属の塊でジャグリングを始めた……

随分と力持ちなんだね？

「マスター、紫ピクミンくらいの腕力があるみたいですね……」

「僕もそう思う…ほんとに赤ピクミンなのかな？」

ピクミンの種類は赤ピクミンを含めると全部で7種。

クイナが言った紫ピクミンというのは、その内の1種で腕力が強いのが特徴だ。紫ピクミンは1匹でピクミン10匹分という特徴を持つ。

更に言うなら力持ちだ……

ちなみに赤ピクミンは火に強いのが大きな特徴である。

「ウォ～!!」

貴金属の塊を真上に投げたピクミンは落下してくる貴金属の塊に向かってサマーソルトキックをかました……

塊は粉々までとはいかなかったが加工サイズくらいの大きさに砕けた……
ちょっと待ってよ!?　今なにしたのこの子!?
「先輩!!　この子、私が知ってるピクミンじゃないです!?」
「マスターこの子ただのピクミンじゃないです!?」
涼香とクイナが本気でビビり出した……
ぶっちゃけ言うと僕も怖い。目の前にいるのは僕が知ってるピクミンなのかな？
あれかな…新種のピクミンなのかな、かな…？
危うくレナ姉と同じ口調になっちゃったよ……
「…ま、まぁ…島の開拓には役に立つんじゃない？」
「ウォ～♪」

羅奈の言葉が伝わったのか、ピクミンはお手伝い頑張りますと言わんばかりにその場で声を上げていた……
本当にこの世界（カケラ）はどうなってんの？

第8話　おっそーい＋いい風きてる？

―ω・、）ノ　ヤァ、穹だよ。
突然だけど目が覚めたら隣に知らない女の子が寝ていたら、
みんなはどう思う……？
なんでこんな質問をするのかって？
それは……
「んぅ……」
現に知らない女の子が僕の隣で寝ているからです。
事の発端はこうだ。
昨夜のピクミンの騒動から一夜明け、目を開けると両脇に違和感を感じたので視線を向けると暁が寝ていた……
ここまではまだいい。問題は反対側だったのだ……
（この女の子……誰!?）
髪は腰まであるロングストレートの銀髪を側頭部後方で二房ツーサイドアップにし根元に紅白の吹き流しを付けていた。

続いて服装？だが、焦げ茶色と白の丈の長いワンピース状のセーラー服で……非常に言いにくいんだけど、スカートはなしに加え黒いガーターベルト、根元に２本の白ラインの入ったニーソックスを着用していました……

「んぅ……？」

目を覚ましたその女の子の瞳は綺麗な橙色。

そして僕を目を見て……

「おはよう♪　あなた♪」

「お、おはよ……」

普通に朝の挨拶をしてきた。

ていうか僕も普通に返しちゃったけど……

次の瞬間……

「やっと起きた！　おっそーい」

またもや知らない、うさ耳の女の子が僕の仮の寝床に入ってきた。

…というか格好があざとい。

何故なら、大きなうさ耳リボン（今気づいた）……に鼠蹊部を辛うじて隠す程度のミニスカート、極めつけはそこから出る黒の見せ下着だった……

もう一度言おう。知らない女の子に対して失礼だけど……あざといよ!!

「マスター、起きてますか～♪　誰ですか!?　隣の女の子は!?」
「…そっち?」
今度はクイナが入ってきた。
ていうか驚くところが違くない?
状況を整理したいので未だに隣で寝ていた暁を起こし広場に向かう事に……

「…この2人も艦娘?」
「はい。しかし目が覚めたら艦娘が居たという状況は前例がないですね」
妖精さん曰く、知らない女の子2人の正体は艦娘らしい。
今朝の出来事を話したら言われたのが今の一言。
いやいや妖精さん……
僕の場合は現にそれが起きたんだけど……
ちなみにうさ耳の艦娘の名前は島風、そして僕の隣で寝ていた艦娘の名前は天津風という。
「穹……ツンデレ系艦娘も簡単に攻略しちゃうのね」
羅奈が意味不明な事を言ってるが敢えて無視。

「…というかクイナの場合は？」
「私ですか？　普通に朝起きて着替えたら何時の間にか島風ちゃんがいたんですよ」
「…着替えてたらって……」
　島風ってステルス機能も持ってるのかな？
　気配には敏感なクイナに気づかせないとは……
「もぅ♡　マスターったらそんなにジロジロ見ないでください♡　エッチ♡」
「…引っ叩くよ？」
「えっ!?　マスターに叩かれる？　なんか興奮しますね！」
「…さてと。今日も開拓の続きでもしよっか」
クイナ（バカ）は放っておくとして開拓の続きをする事になった僕達。
　みんなも僕の意見に異論はないようだ……
「ポォ」
　何するか迷ってるとピクミンが声をかけてきた。
「この先に川辺があるらしいと言っていますね」
　妖精さんが翻訳してくれた。
　ピクミンの言葉が分かるのは妖精さんくらいなので僕としても助かる。
　それにしても川辺か……

（…ま、行くだけ行ってみるか）

開拓に必要な物が見つかればいいなと思う僕だった。